

メッセージアウトライン サムエル記第一27:1～12 「ダビデの決断」

[1-2]「ダビデは心の中で言った。『私はいつか、今にサウルの手によって滅ぼされるだろう。ペリシテ人の地に逃れるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、イスラエルの全領土内で私を捜すのをあきらめ、こうして私は彼の手から逃れられる。』ダビデは、一緒にいた六百人の者を連れて、ガテの王マオクの子アキシユのところへ渡って行った」

ダビデは彼のいのちを狙うサウルの追討によって、常にイスラエルの地、特に南方を逃げ回っていた。この時ダビデに従う者はすでに六百人になっていた。主はサウルの不信仰と高慢、自己中心な行いのゆえに彼から去られ、代わりに主からの悪い霊が彼を悩まし、精神錯乱にしばしば陥るようになっていた。サウルはペリシテ人との戦いで、自分より名声が高くなったダビデを自分の王位を狙う者として、殺そうとしていた。それゆえ、ダビデはこのままイスラエルの地を逃げ回っていても、いつかサウルによって殺されるだろうと思い、一つの結論にたどり着いた。それはイスラエルの地から出ることである。

同胞であるイスラエルの民の声もそのことを示唆していた。→26:19(しかし、イスラエル人全員ではなかったであろう) 特にダビデたちの行く先々の隠れ場を、サウルに告げ知らせた人々のことが頭にあっただのかもしれない。それでついに彼はイスラエルの地を出ることを決断した。出て行く先は死海の東のモアブ人の地か、死海の南のエドム人の地か、今まで数々の戦いをしてきた地中海沿いの平野に主に住むペリシテ人の地か。この時、彼はどこに行くべきか主なる神に祈ったか、あるいは祭司エブヤタルの持つエポデ(23:6)によって導きを求めたかは書かれていないが、神に従うことを第一とする今までの彼の生き方から、主の導きによる自らの決断でペリシテ人の地に行くことを選択したのであろう。

そして彼とその部下たちは、ガテの王マオクの子アキシユのところへ渡って行ったのである。

「ガテ」…地中海沿いのアシュドデから南方に約20キロメートル、エルサレムの南西約50キロメートルのペリシテ人の町。あのダビデが討ち取った巨人ゴリヤテの出身地であり、しばらく前にダビデは単身この町に行き、亡命しようとしたが、捕えられ、狂人のふりをしてようやくそこから逃げたといういわくつきの町であった。(21章) ペリシテは都市国家であり、各地の大きな町にはそれぞれ王がいた。ガテの王はアキシユであった。

[3]「ダビデとその部下たちは、それぞれ自分の家族とともに、ガテでアキシユのもとに住んだ。ダビデも、その二人の妻イズレエル人アヒノアムとカルメル人アビガイルと

一緒であった」

彼らは「ガテでアキシュのもとに住んだ」とあるので、ダビデは丁寧にアキシュに取り入り、今までの事情を話して、傭兵(雇われ兵)としての契約を結んだのかもしれない。「昨日の敵は今日の友」というわけか。もちろんダビデの部下の内からも、ペリシテ人の内からも反対を唱える者もあったであろう。しかし、彼らはガテでアキシュのもとに住むことができたのである。それも主の摂理のうちにあったことであろう。

[4]「ダビデがガテへ逃げたことが、サウルに知らされると、サウルは二度と彼を追おうとはしなかった」

時として情緒不安定、精神錯乱に陥るサウルであったが、さすがにダビデがペリシテ人のガテへ逃げたことが知らされると、二度とダビデを追おうとはしなかった。彼はペリシテ人がダビデを殺してくれると思ったのかもしれない。ダビデのいのちを取るといふサウルの一大目的はここに取りやめとなった。彼は本来のイスラエルの王としての職務に励まなければならないが、それは大部分はペリシテ人との戦いであった。

[5-6]「ダビデはアキシュに言った。『もし、私があなたのご好意を得ているなら、地方の町の一つの場所を私に下さい。そこに住みます。どうして、このしもべが王国の都に、あなたと一緒に住めるでしょう。』その日、アキシュはツィクラグをダビデに与えた。それゆえ、ツィクラグは今日まで、ユダの王たちに属している」

しばらく、ガテで過ごした後、ダビデはアキシュに地方の町の一つの場所を自分たちが住むために下さいと願った。彼は「どうしてこのしもべが……あなたと一緒に住めるでしょう」と謙遜に言うが、その本当の理由は、①ダビデに従う者たちがガテに住むことによって、人種の混合が起こることを避けたい。②宗教的自由、活動の自由が奪われる。……主なる真の神を礼拝するイスラエル人とダゴンなどの偶像神を拝むペリシテ人が同じ場所に住むことはイスラエル人が偶像礼拝の影響を受けてしまう。→出エジプト20:2~5 ③六百人という大集団を養うのはアキシュにとって重荷となる。自分たちの食料は自分たちで確保したい。

アキシュはダビデの申し出に対してツィクラグを彼に与えた。ツィクラグはガテの南東約30キロメートルの地。この地は名目上はイスラエルのシメオン部族の相続地であったが(ヨシュア19:5)、実際はペリシテ人が占領していた。アキシュにしてみればダビデたちをパレスチナ南部に配置しておけば、南方のアマレク人などの遊牧民の侵入の防波堤となると考えたのであろう。

「それゆえ、ツィクラグは今日まで、ユダの王たちに属している」とは、このサムエル記の記事が後のイスラエルが北イスラエル王国と南ユダ王国に分かれた南北朝の時代に書かれたことを示している。(BC8世紀頃か)。

[7]「ダビデがペリシテ人の地に住んでいた日数は一年四カ月であった」

サウルの配下にあるイスラエル人は、26:19にあるようにダビデを追い出し、ペリシテ人の地に住ませたが、ツィクラグに住むことによって、ダビデとその部下たちは

決してペリシテ人の風習や偶像礼拝に染まらず、自分たちの神の民としての純粋性をこの期間保っていたのである。

[8-9]「ダビデは部下とともに上って行って、ゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人を襲った。彼らは昔から、シュルの方、エジプトの地に及ぶ地域に住んでいた。ダビデはこれらの地方を討つと、男も女も生かしてはおかず、羊、牛、ろば、らくだ、また衣服などを奪って、アキシユのところに帰って来た」

「ゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人」…パレスチナ南部から西はエジプトに近いシュルの荒野、南はシナイ半島南部にかけて住んでいた民族。特にアマレク人はイスラエルの出エジプトの時、イスラエル人を襲っている。→出17:8 主は繰り返し、このアマレク人を討ち滅ぼすように命じておられる。→申命記25:17-19、Iサムエル15:2-3

ダビデは部下とともにツィクラグから出陣し彼らを襲い、打ち滅ぼし、戦利品をもってアキシユのところに帰って来た。これは戦利品の一部を上納するという契約が結ばれていたと考えられる。

「男も女も生かしてはおかず…」とは残酷ではないかと思うが、これは口封じの意味もあるし(11)、もともと主なる神はカナンを神の選びの民イスラエル人が占領することによって神の前に罪に罪を重ねていたカナン人を聖絶する(滅ぼす)ことを命じておられた。→申命記7:16-26、9:1-5、創世記15:13-16

彼らは幾世紀にもわたる長い年月の間、その行いを悔い改めて主のもとに立ち返る機会が与えられ、主も忍耐して待っておられたが、決して主のもとに立ち返らず、罪に罪、悪に悪を重ねて、ついに主は神の選びの民として育てられたイスラエルを用いてさばかれたのである。そして今ここで主はダビデを用いておられるのである。

[10-11]「アキシユが『今日は、どこを襲ったのか』と尋ねると、ダビデはいつも、『ユダのネゲブとか、エラフメエル人のネゲブとか、ケニ人のネゲブとか答えていた。ダビデは男も女も生かしておかず、ガテに一人も連れて来なかった。『彼らが【ダビデはこういうことをした】』と言って、私たちのことを告げるといけない』と思ったからである。ダビデはペリシテ人の地に住んでいる間、いつも、このようなやり方をした』

アキシユはダビデに「今日は、どこを襲ったのか」と尋ね、ダビデはそれに答える。「ネゲブ」…ユダ部族の領地の南方部を指す。「エラフメエル人」…ユダ部族の分かれの一氏族(I歴2:3-9)「ケニ人」…モーセのミディアン人の舅の一族で後にイスラエル人に同化し、シナイの荒野に住んでいた。→民10:29-33、Iサムエル15:6

つまりダビデは、すべてイスラエル人関係のところを襲っていたと報告したのである。ネゲブはペリシテ人にとっては興味のない遊牧民の地であった。

[12]「アキシユはダビデを信用して、こう思っていた。『彼は自分の同胞イスラエル人に、とても憎まれるようなことをしている。彼はいつまでも私のしもべでいるだろう。』」

アキシユはダビデたちが出陣から帰って来る毎に、戦利品を受け取り、彼は自分

の同胞イスラエル人に憎まれるようなことをしていると考え、信用した。

このようにサウルの支配するイスラエル人はダビデをペリシテ人の地に追いやったが、それで終わりではなく、主なる神は彼を用いて、イスラエル人のカナン入国以来の宿題であるカナン人、アマレク人たちのさばきのために今、ダビデを用いられているのである。

アキシュは「彼はいつまでも私のしもべでいるだろう」と思っていたが、それは大きな間違いであることが、後で分かるようになる。

私たちも、人生において、様々な困難や窮地に立たされ、苦しみの中に置かれることがあるかもしれないが、ダビデのように主により頼みつつ、知恵を与えられ、状況を判断しつつ進む者でありたい。→箴言3:5-6

そして私たちは今日のような聖書の箇所を用いて、戦争や殺し合いを正当化してはならず、今はイエス・キリストにある平和の福音が宣べ伝えられなければならない時であることを覚えて、平和の福音にふさわしく生き、イエス・キリストにある救いの福音を伝えていくことが大切である。

→エペソ2:10~19